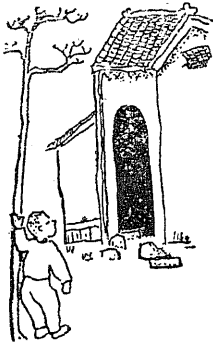


# 幼児の神経質

村山貞雄



## 序

幼稚園保育の重要な仕事として、(1)社会性を円満化し、且つ就学が円滑におこなえるようにすること、(2)音感教育などの、いわゆる芸能教育をこの時期におこなうこと、などとならんで、(3)精神衛生を中心とした性格教育の問題がある。この性格教育の問題で、わたしたちがもつともしばしばぶつつかるのは、神経質の幼児をなおしたいがどうしたらよいかという質問である。そこで、この問題について、具体的な例をあげながら説明していこう。

### 〔例の一〕 潔癖

富田福子 満五才七ヶ月

知能年齢七才〇ヶ月 ひとり子

福子は、現在或るキリスト教幼稚園の二年保育児であるが、母親が福子の神経質なのを心配して相談にやつてきた。

福子は、一見して変つたような食物は、絶対に手をつけようとしない。食べてみると、そうでないものでも、頭から嫌いだと決めてかかつて食べようとしないのである

また服装や身のまわりのことにたいしてもちよつと汚れたものをも非常に気にして、着物が少し汚れてもとりかえてくれとせがむ。彼女は家庭では「やかましいから黙りなさい」と時折叱られるほど、よくしゃべるが、人中にでると圧倒されてものが言えない。母親にたいしても自分の言つたことは、それを通してやらないといつまでもしつこく言うので、母親もついにこんまけしてしまふ。

以上が母親の言い分であるが、これは、神経質な性格がとくに食物と衣類にあらわれている例である。

食物にたいして神経質になるのは、(1)身体の虚弱、とくに変なものを食べて病気になるつたあとや、常時胃腸の弱い場合、(2)においや食物の原形(たとえば豚肉にたいする豚)を連想して悪感を感じる程度が強い場合、(3)あまり食欲がなく、また味にたいする好き嫌いのはげしい場合などがあるが福子は、身体も強く、食欲もある。

そこで、母親の日頃のしつけ方をきいてみると、清潔のしつけがかなりきびしく、

着物がちよつとよごれてもやかましく注意しており、アイスキャンデーなどでも、よごれているから口にはいけないと始終小言を言っているそうである。要するに母親が神経質であり、とくに食物や衣類にたいして清潔ということを強調しすぎるのが原因の一つであると考えられる。

福子は、ひとり子であるが、ひとり子によくあるように、相当わがままに育つていくことが、福子が自分の言つたことが通らないときにいつまでも我を通そうとする。ことからでも知られる。このような、我がままがこうじて、ヒステリックな性格となりそれが食物や衣類にあらわれたと考えられる。

なお、家族の子供のときに食物の好き嫌いがあつたか否かをたずねてみたところ、母親が幼いときにのみ、好き嫌いがあつたということであつた。

以上の結果、福子の教育方針として、今後甘やかさないようにとくに気をつけ、その日常生活を放任してあまり干渉しないこと、食物や衣類にたいして神経質にならぬ

ように、また福子の前でもそのような話をさせぬように、家族自身が気をつけることなるべく家庭から出してよその子供達と遊ばせるようにし、休み中には親類などに連れて行くこと、家族が何でも食べ、且つおいしそうに食べることを、家族がおおらかな性格になるように努力すること、等の注意をしたのであるが、福子の両親はこの指導をよく守り、たとえば親類に連れて行つてそこで福子が何でも食べるようにしつづけた。

この結果、約二年経つた頃再び福子の母親に来てもらつて相談したところによればはじめに述べた心配は全くなくなつたそうである。母親も幼児期に好き嫌いがあり、児童期以後はそれが治つているから、福子自身にもあるいはその傾向があつたのかも知れないが、母親があまり衛生について口やかましかつたり、わがままに育てた場合には、福子のような神経質があらわれるのである。

## 〔例の二〕 心配性

谷崎忠雄 満五才〇ヶ月

知能年齢六才三ヶ月 長男  
忠雄は現在或る幼稚園に在園中であるが感受性が非常に強い。たとえば、万寿姫の話をしてきかすと、はらくと涙をこぼす幼稚園の先生からも、お宅のお子様は非常に感受性が強いですとよく言われる。

ねる前に翌日幼稚園に行くための準備をするのはよいが、それを妹や母親が少しでも動かしておけば、大変である。近頃(八月)おぼんは何をするものかとたずね、亡くなつた人をお祭りするのだと答えるとその「亡くなる」ということを気にして、「どうして死ぬの」とか「お母さんも死ぬの」とか、「ぼくとつゆ子(妹)じやぼくの方がとし上だから、僕の方が早く死んじやうんだが、そうなつたらどうしようか」などたずねだした。また孤児の里親制度の話きくと、「お父さんとお母さんが死んだら僕どうしよう」と、非常に心配そうにつぶやき、死んだ人は可愛そうだと朝から晩まで心配している。鶏をしめる話をしたら、またそれを気にして……

忠雄の神経質というのは、大体以上のよ

うに、いわゆる心配性である。このような心配性の原因は後天的に発見することが不可能なことが多い。非常におそろしいことに遭遇したり、継母その他の人にぎやく待たされた幼児が、このような症状を呈することがなくはないが、それもはつきり原因をつかめることはまれである。すなわち、その多くは素質的なものである。

そこで、彼の近親についてこのような状態がなかつたかをたずねたところ、母の弟（武夫・東大在学中）が子供の時全く同じようであり、祖母は「この子は、武ちゃんと丁度同じだから、よい方に伸びるとよくなるが、悪い方に伸びると心配だ」と心配しているそうである。このように素質的なものが強く考えられる。

生育中の原因については母親にいろいろ質問しても見当らないが、妹（満二才・知能指数一〇九）と兄弟げんかをする、大きい方の忠雄をつい叱るようになり、父親からきびしすぎると言つて母親が時々注意される。そのため忠雄が遠慮するようになるのかも分らぬと母親は言う。しかし、これ位のことでは遠慮するようになるところ

に、むしろ忠雄の素質のあらわれがみえており、母親の育児態度が格別きびしすぎるとも考えられない。

彼は身体は丈夫であるが小さい。しかしこのことも別にこのような性質の直接の原因とは考えられない。

なお忠雄は左利きで、はさみは左で持ちぬりえも右ではほとんどできない。食事のときのサジは右でも出来るという程度でかなり強度の左利きである。そして、食事をおいしそうに食べているときに、家族がなおすようにやかましく言うと言き出しそうになつて食事をやめてしまふというから、こういうところにもほんの少しは原因がある。

以上のように、忠雄の神経質は心配性として強くあらわれており、素質以外にはほとんど原因が分らない。したがつて、このような性格を反対に伸気にしようとしても失敗に終るであろう。非常に平凡な方法であるが、恐しいことに遭遇しないように環境から保護してやること、つまりぬことに心配事をしていようであつたら、早くそ

れを見つけてそれが何でもないことを説明してやり、一つのことにはこだわつて心配することがないようにしてやること、身体を強くすること、ハイキングや旅行などをさせ、また夏休みなどに親類などに連れて行くこと、ひどく叱らぬこと、死後の世界を楽しむものと思わせること、等に注意して指導するのがよい。要するに、指導の根本態度としては、このような性質そのものが悪いのではなく、程度が強すぎたり内容があらぬ方にはしつたりすることが悪いのであるから、この性質そのものを悪いとして子供を非難して、子供に劣等感をおこさせることをつしまなければならぬ。たとえば忠雄は、英語を習っているが、はつきり分つてしまふまでは絶対に言わず、遊びもすつかり分らないうちに、あやふやなまま行動するようなことはない。この例でも分るように、彼の態度には欠点も含むかわりに美点もつゝんでるのである。知能指数も百二十五であり、よく導けば叔父のようになることは、祖母の言葉のごとく推測される。

以上の指導は、海軍兵学校を出た父親も府立高女を出た母親もよく守つてくれた。たとえば、普通の本を買つて与えるときにも、その内容を細心に選んだし、劣等感をもたすようなことは一切避けるようにしたその結果一年後に葉書を出して来てもらった時は、幾分よくなつたということであつたが、約二年後には、おとなしい明るい児童として著者の眼にも映じ、母親もこの頃は前のように心配しなくてよいようになつたということであつた。

### 〔例の三〕 固執癖

蚊野良一 満四才三ヶ月  
知能年齢五才八ヶ月 長男

良一の指導法についてはじめ相談をうけた理由は、神経質ということではなく、ちよつと變つた理由からであつた。彼は、先日動物園に連れて行かれ、母親が切符を買つているうちにいなくなり、一人で不忍池まで遊びに行つていたというのである。このようなことは先日にはじまつたことではなく、もう二か月ほど前にも三葉病院に連れて行つたところお茶の水の下まで遊びに

行つており、さらに七か月ほど前には父親の出勤のあとを追つて、おとなの足で三十分位かゝる駅まで行つていたことなどが重なつた結果によつてわかつた。ところが著者がいろ／＼たずねているうちに、父親はこの子の変な癖について何気なく話した。すなわち、小さい時からそうであつたから、いつ頃からはつきりは言えないが母親がうつつかりして右足からズボンをはかすと、こちらからはいやだと言つて、どうしても左足からはく癖があつた。満三才頃にはそのことが非常にはつきりしてきた。

そのかわり左を好み、無理をしてもドアの左側を通る。右と同様に四という数字を非常にきらい、三を好み、テスターの話によると、知能検査中(鈴木ビネー式検査第三十三問)で四円という数字を使う問題があつたが、「ぼくは四がきらいで三が好きだから三でしてくれ」と言つて、三にかえて知能検査をしたということであつた。色は赤を好み、青をとてもきらい。たとえばクレオンはまず赤を使い切つてしまふ。著者もそのクレオン箱を見てみたが、昨日買つたところだというのに、もう相当使つて

おり、赤がいちじるしくへり、青は新しくつた。

なお彼は妹をいじめ、悪いおもちゃのみを与える。よその子供に自分のおもちゃを借すことをいやがり、よその子供がおもちゃを持つて帰れば夢中になつて取りかえしに行くが、自分のものと人のものとの区別がはつきりしているという訳ではなく、ただ所有欲が強いだけである。このような点が友達に意地悪と思われるためか、仲間はずれになることが多いという。

以上のことから、彼の神経質はいわゆる固執癖とみられる。この固執癖は児童期以後にはしば／＼みられるが、幼児期にこのような強い固執癖があることは少い。

このような固執癖の強い場合、その原因の多くは素質的なものに求めるより仕方がない。そこで家族についてしらべてみたが似たものを全く認めることができなかった。尤も父親は商業学校を出て現在会社につとめており、母親も商業学校を出てつとめておりと言ひ、母親に少し勝気なところがみられた。母親がゆきにてているの

で、屋間は同居している母の両親が良一を  
みているが、母親が良一を叱ると、祖父母  
がむきになっておこり、親子げんかになり  
かねないということであつたから、母方に  
神経質な素質があるのである。

またこのような幼児は精神薄弱児に時折  
みられるが、良一は知能指数百三十三で秀  
才級である。彼の生育史をみると、満二才  
で平仮名が全部読め、二才六か月で平仮名  
と片仮名が全部書けたそうである。現在数  
字は百位まで書け、漢字をおぼえたがつか  
ている。(若干漢字は書ける)知能はこのよ  
うに高いが、普通の子とは少し変つており  
他の子供がしているベীগオマやメンコやチ  
ヤンバラには全く興味なく、仲間に入つて  
行かぬため、大体仲間はずれになつてい  
る性格がかなり内向的である。

なお彼は吃音をもつている。すなわち、  
満二才頃に字をおぼえはじめたが、字をお  
ぼえはじめた頃から急にどもるようになって  
た。ただし吃音は祖父が子供のときにも、  
ちよつとその気味があつたというから、吃  
音の素質があつたのであろう。

以上、良一は固執癖のほかには放浪癖と吃  
音癖をもち、所有欲が強く、明かに神経質  
であるが、知能が高く、近親に同種の固執  
癖のあるものは見当らない。

ゆえにその指導は難しく、満二才頃には  
すでにこのような固執癖があつたと考えら  
れるから、精神分析による原因治療はかな  
り困難である。そこで、家族の者が大らか  
になり、口論などはしないように(とくに  
良一の前でしないように)して、温いふん  
い気をつくるようにすること、母親がで  
きただけ家において良一の心を安定させること  
嫌いな数字・色・方角を良一の好むもの、  
または快いものと連結するように絶えず努  
力すること、強度の内向性であるから、こ  
れを矯めるように努力し、社会性をつける  
こと、明るい偉人の伝記や英雄伝などをき  
かせ、こせ／＼した小心をなおすこと(彼  
は小心であるが、一方妙に気が大きくてお  
となを驚かすことがある)道に迷つた時の  
ために必ずしつかりした名札をつけること  
放浪の機会を少くし、とくに親類の人が来  
た時などには注意すること、などに気をつ  
けて指導するように指示した。

約一年半後に母親に来てもらつたとこ  
ろ、とくに家族がおゝらかになるように  
し、母親ができるだけ家においてやるように  
気をつけて育てた結果、ほかの点はかなり  
よくなつたが、まだ数字と方角は好悪があ  
るといふことであつたので嫌悪の原因につ  
いて精神分析的な治療をしようと思ひ、子  
供を連れて来るようにと言つておいたが、  
まだ来ない。

### 〔例の四〕ひとり言

川山康夫 満五才七ヶ月

知能年齢八才三ヶ月 第二子長男

康夫は、神経質でひとりごとが多い。と  
くに性的なひとりごとを言う子供として、  
保育所の保育につれて来られた。身体は大  
柄で、見るからに元氣そうな、人の世話を  
よくするいわゆる級長タイプである。

しかし保母の話によると、彼はかなり神  
経質であり、「何々しなさい」というよう  
に命令すると反抗的になる。また友達が粗  
相をしたときに「早く告げましようね」と  
言つと、「わざとしたんじやないよ」と言

つて弁解してやることが多い。

性的なひとりごとは、母親の妊娠中に、とくにひどかつたそうで、何でもすぐにパンツとか猿股とかいうことに結びつけて、ひとりごとを言っており、今でも何か話をしているときに、「パンツをはかしてしまおう」というように性的な内容にもつてゆくこのようなひとりごとをきいていると、いかにも彼が神経質であるように思われるというのである。要するに、彼の神経質は、「ひとり言」という癖を逞してもつとも強くあらわれている。

著者が康夫と直接会話して観察したところ、少しも神経質にみえない。むしろ知能も高く幼稚園のリーダー園児の親がする。この子供が神経質になるのは、家庭環境が何かに特別の原因はあるのでないかと考えられた。そこで家庭環境についてしらべてみたところ、父親は歯科医をしており、マージャンなどで夜ふかしをすることが多い母親はやせて神経質であり、父親と非常に不和であることが分つた。康夫に父親と母親とどちらが好きかとときくと、直ちに「お

母ちゃんが好き」と答えた。そして「お父ちゃんはおねぼうだから、お母ちゃんは早くしてお母さんをおこすこともあるなあ」と快活につけ加えている。なお保育所に入つてすぐに「うちのお父ちゃんは、昨日マージャンをしていて、お母ちゃんに叱られたんだよ」と突然言つて、保母を驚かしたそうである。両親の不和は相当なものらしい。

父親の康夫にたいするしつつけの態度も圧倒的なものであつた。康夫は父親が戦争から帰つて来たときに生れた。父の康夫にたいする教育は、強制的なやり方が多く、体罰として康夫をよく押入れに入れる。保母が家庭訪問をしたときも、康夫に「早くおじぎしろ」と命令しており、康夫がむつとすると（康夫は命令されたことにたいして反抗的になる性質をもっている）「こうするんだ」と言つて頭を押さえつけたそうである。そのとき康夫は、保母に「いらつしやい」と言つて坐つて、ひとりぶつぶつ言つていたそうである。なお、母親の兄が非常に奇人であると言われているが、技術的

にすぐれた面があるので、現在はその方面で成功している。

以上のように、康夫が神経質なのは、素質的な面と環境の面に原因が明瞭にあらわれている。素質的な面としては、母親の兄が奇人であること、母親が神経質であること（尤も現在夫と不和のために神経質になつている点もうかがわれた）父親の育児態度からみても分るようになり、父親も線が細いと思われること、などがあげられる。

一方環境としては、父親が幼児康夫の心理を無視した扱いをすることによつてうつけきした反抗心と、父母の不和、とくに父親が夜遊びをし母親が神経質にそれを非難する生活によつて生じた不安定な感情があげられる。

以上のことから、今後の指導としては、康夫の前で性的なことを言わないこと（尤も母親は性的なことを言つたおぼえもないし、康夫が家庭で性的なひとり言を言うのをきいたこともないと言ふ）両親の不和を解消すること、少くとも子供にたいする義

務としても不和な態度を康夫の前で示さないこと、父親は康夫の行為の結果だけではなくその心理的な動機をみるようにし、できれば今後絶対に叱らぬこと（康夫が妹をいじめるといつて叱られることがよくあるが、その大部分は何の気なしに押ししたものが力が強いために妹がころんだり、妹にそのようなことをしてはいけないよと言つて世話をやいてやつた結果であることが多い）康夫は理論的のものを考えることが好きだから、悪いことをしても頭から叱りつけるような態度でなく、柔く道理を言つてきかせるようにすること、ひとりごとを言うのはみつともないことだからだまつて考えるようにしなさいと教えること、などを注意して指導するようにした。

康夫の母はそれまでも康夫の教育に熱心で教育の二大方針として、絶対にうそをつかぬことと結果だけみて叱らずに動機を考へてやることにしていたが、今後この方針を強めた。（これらのことは、母親が今日行けないがといつて保母に持つて来させた手紙の意見と彼女の育児日記によつて知

られた。育児日記には、康夫がした毎日の質問がこくめに記載されており、本人の状態としても次のことが記されていた。(1)以前は病気をよくしたのが、最近はず丈夫、熱があるとうなされて泣く。(2)弟をいじめているようにみえるがよく視ているとそうでない。(3)うそをつかれるのをとても嫌う。(4)本が好きである。

父親は保母から相談の結果をきいて自分の態度を改めることを約束した。そして若干その態度を改めた。

その結果一年あまり過ぎた頃に家庭を訪問したところ、ひとりごとは全然言わぬよう、別に神経質には思えないということであった。尤もこの頃の康夫は外ではばかり遊んであまり家に帰つて来ないさうである。

### 〔例の五〕 不安定

和田礼子 満四才三ヶ月

知能年齢五才〇ヶ月 ひとりり子

礼子は、以前は一つのことを何んでもよくつづけてやり辛棒強かつたが、近頃は注意散漫になり神経質になつた。たとえば、彼女が何かしているとき、音がすると驚い

てパツとその方をむく。一人で遊んでいるときも、母親が誰かと話をはじめると、パツとそのことに注意して、またもとの遊びをする。このように注意が集中しなくなつてから、おしやべりがさかんになりだした。なお、礼子はまわりがおとなのせいか子供の遊ぶことに興味をもたないさうである。礼子の神経質についての母親の説明を簡単に要約すると以上のごとくである。このように彼女が強くあらわれている。このような精神の不安定は、(1)近頃、いちじるしく心を動揺させるような事件にぶつかつた場合、たとえば、不意に母親がいなくなつたような場合、(2)いちじるしい心配事のある場合、または、心配が長くつづいていている場合、(3)環境から圧迫されている場合、または、環境が本人と非常に不調和な場合、(4)身体に、異常のある場合、(5)精神の異常をきたす前等があるが、近頃別に変つたこともなく、心配事についてしらべても発見できなかつたし、礼子の身体はきわめて壮健である。

ところが、母親の次の言葉によれば、本

人と環境の不調和を明瞭に發見することができる。母親の言うところによると、近所には年上の子（小学三年—五年）が多くて適當な子供がおらず、彼女は外出しても、よいことはなに一つもおぼえて来ないから、家にとじこめていたという（母親が彼女が子供の遊ぶことに興味をもたないと言ったのもここに原因があつた）外に出ると、荒々しくなり男の言葉遣いをするようになるから、外出させぬようにしているのである。それでも元氣な子供のことだから、まれに外出するのだが、泣かされたり家に帰つて氣づかされているような様子は全くない。現在精力をもてあましてるようにみえる。またおとなの話を非常に注意してきいている。以上が母親の言葉であつたが、この例は「ひとり子、または長子の場合、彼女のような育児に熱心な母親（この母親は或る女子専門學校を卒業しており、礼子の育児に非常に高い理想をもつていた）によつてしばしばおかさされるあやまち」で、時々違ふ例である。要するに母親は子供の本性をいがるような環境をつくつてゐるのであり、このままでいけば、礼子の神経質な態

度はますます強くなつたであらう。

ここまでわかれば指導は簡單である。よい言葉をつかう習慣をつけることは望ましいことであるが、住所を他の所に変われば、理想をさげるより仕方がない。現在どのように悪い言葉をつかつていても、たとえば三年後に、上品な言葉をつかう邸宅地域に移つて二か月ほど経てばたちまちよい言葉に變りうることを話して、近所の子供達と十分遊ばせるように強く言い幼稚園に入れることをすすめた。

母親は学年の中途であつたが、礼子を近所の幼稚園に入れ、いままでの態度を一變した（そのときまでも母親は自分の育児態度を非常に心配してゐたのである）礼子は幼稚園に行きだすと、みる／＼元氣になり、三か月ほど後母親があいさつに來て言うには、神経質のシの字も見当らないということであつた。この例は環境を無視した教育理想が幼児にいか非効果的であるかを示すよい例である。

## 結 論

以上、五つの例をあげたが、神経質の種々の類型を知り、神経質の具體的な概念を把握するためには、さらに五・六の例を挙げることが必要である。いつか機会があればこのことを果したい。

以上の五つの例でも分るように、神経質な幼児は必ずしも知能が低いことはない。むしろ知能の高いものが多い。また神経質の原因は、素質的な内容が強く考えられ、幼児の近親に似た人がなかつたかをたずねた場合、ほとんどすべてが心当りをもつてゐる。また長子やひとり子の場合が多く、わがままに育てることも神経質を助長する大きな原因である。その他、母親の神経質な場合などの複雑な家庭環境、身体の虚弱、などもその原因をなす。妊娠中に栄養が非常に悪かつた幼児で神経質な幼児を二人診たが、その因果關係は全く分らない。なお生育中に非常に恐しいことであろうとその印象が強く残り、その印象を中核として神経質な性格を造ることがあるから、注意しなければならぬ。